

その時、空から太陽は姿を消した。
夏場、時刻は午後 4 時。空には雲ひとつない。
本来なら遮るもののない太陽の光が青空を照らすはずだ。
しかし現実の空は黒く塗りつぶされていた。
この太陽の光なき空では異形の怪物が現れる。

「きゃあああ！！」「助けてくれえ！」

町中を闊歩する、異形の人型たち。
シルエット自体は細めの大人の男性と変わらないものの、特徴的なのは彼らを形づくる材料だ。
コンクリートでできている。その異様は、まるで人の型にコンクリートを流して固めたようだ。

「わっはっは。逃げろ逃げろー！」

コンクリ人形たちが街を襲う様子を高笑いしながら眺める少女がいた。
小学生中学年ほどの見た目でもとても幼い。
彼女の他の特徴を一言で表すなら“黒”だった。
黒いショートヘア、黒い瞳、黒い肌。
身体にぴったりとはりついたボディスーツまでもが黒い。
黒い少女は、阿鼻叫喚の人々の様子をショーでも見るかのように楽しんでいた。

「そこまでだよ！ 装光妖精ソルライト見参！」

混乱の現場に力強く響き渡る声。
その声の持ち主は、黒い少女と同じほど幼い少女だった。
オレンジ色のショートヘア、赤の瞳。
白地に青襟、赤のスカーフタイを基調とした夏服セーラー服はところどころにオレンジ色に光るラインが走る。
扇状の胸当て上の首筋からは黒いインナースーツがのぞかせる。
左右の手先には黒いグローブの上に少女のあどけなさには似合わない金属質な銀のガントレットが装着されている。
左右の足も同様。黒いハイソックスにかぶせるように同じく銀に輝く金属ブーツがはめられていた。
胸元で赤いクリスタルがコスチュームの光るラインの終着点となり、スカーフタイを通して光り輝いていた。

彼女は装光妖精ソルライト。
“光”の力を駆使し、異形と戦う正義の戦士だった。

「おお、装光妖精だ！ 装光妖精がきてくれた！」

ビシッとポーズをとった正義の戦士の登場に、逃げ回っていた人々は希望の歓声をあげた。
ソルライトはこれまで幾度も異形たちを倒し、人々を救ってきたのだ。
その登場は絶望を希望に変えるには十分なことだった。

「むむー。ソル、いつも邪魔して～。いっけ人形兵！」

黒い少女が号令をかけると、人形兵と呼ばれたコンクリ異形たちが一斉にソルライトに向かう。

大の大人ほどもあるコンクリートの塊が迫ってもソルライトに動揺はない。

「はっ！」

逆にソルライトの方から距離を詰め、間合いをつぶした。

「はあっ！」

脚甲をまとったハイキックが人形兵の一体にヒットする。

衝撃で人形兵が宙を舞い、コンクリートの塊は砕けた。

その間にもまたソルライトはまた別の人形兵に距離を詰めて、今度は拳を打ち出す。

穿たれるコンクリートの腹。またも人形兵は砕け散った。

「シャドウ、今度こそ逃がさないよ！」

ソルライトは黒の少女の名を呼び地を蹴ることで距離を詰めにかかる。

しかし、シャドウと呼ばれた黒の少女はにやりと笑った。

「っ！」

ボコンッと地面が盛り上がった。

そこから這い出てきたのはさきほどと同じ形の人形兵。

ただそのサイズはさきほどの3倍近くだった。

「やっちゃえ、でかぶっ！」

シャドウがまたも号令を下す。

巨大な拳が小さなソルライトを叩き潰す態勢に入る。

ソルライトは構えたまま一度、右の拳と足を後ろに引いた。

それは弓矢が前に射られるため、後ろに引かれる準備動作。

さらに引いた右拳にはオレンジ色の光が集まり輝きを増していく。

そして、ソルライトは光のエネルギーをまとった右拳を思い切りつきだしこう叫んだ。

「ソル・ブレイバー！」

ソルライトの必殺拳が激しい閃光とともに巨大人形兵を叩く。

オレンジ色の光に包まれた巨大なコンクリートはボロボロと砕けて崩れおちた。

「あっ！ また逃げられた！」

ソルライトがシャドウを探しても彼女はもうこの場にはいなかった。

どさくさにまぎれて逃げたようだ。

「でも、まっいっか」

仕方ないと息を吐きソルライトが空を見上げる。
徐々に空の暗闇は青色に押し出されて太陽が顔を出した。
太陽が街を照らす“日常”だ。

「ありがとう。ソルライト！」

人々が異形を退治し空を取り戻してくれたソルライトに感謝の言葉を述べた。
それにソルライトも笑顔で手を振って応える。

「気にしないで。みんなの平和はわたしが守るから！」

そしてこの場での仕事を終えたソルライトは地面を蹴って常人では出せない速度でこの場を去るのだった。

「ふう」

と日之宮あさひは息をついた。

人通りの少ない路地裏で学校指定のセーラー服のスカーフタイを整える彼女こそ、装光妖精ソルライトの正体だった。

ある日あの暗闇の空と異形たち——シャドウはライフマテリアと名乗っていた——が現れるとともに託された光の力。

元より正義感の強いあさひが戦いに身を投じるのは自然だった。

終わりの見えない戦いに不安がないわけではない。

しかしみんなを守れる力を持った自分が戦わなければ。

次の戦いへの決意を胸にソルライトはひとまずその場を後にした。